

無異元來禪師略伝

長谷部幽蹊

一、博山和尚の生涯

元来の伝歴の概要是弟子智達劉日果の撰した「博山和尚伝」、吳應賓の手に成る「中興信州博山能仁禪師無異大師

塔銘并序」、法眷、永覺元賢撰の「博山無異大師衣鉢塔銘」等によって窺い知ることができるが、無明慧經、晦台元鏡、見如元謐、古航道舟等諸師の語錄の記述を併せ参照し、補足確認すべきであろう。

(柴栗の類)を糜とし之を養つた。彼が死に至らなかつたのは寧ろ奇蹟であつたといわれたようである。そのほか伝には一様に元来が幼時より慈悲の念の篤かつた事、やや長じても葷肉酒等を口にしなかつた事などを挙げてゐる。

十六才の時、出家を志して金陵の瓦棺寺(江蘇省江寧府在)へ行き、徑山七十一代、無極門下雪浪洪恩の法華を講ずるを聞いたが、この法は思慮分別の及ぶべからざるものであり、文言を隨逐することの非を感じて師の下を去り、建武へ往き、五台の靜菴通和尚を礼して薙髪受業し、天台止觀を修し露坐して内外を管せず、寒暑にもやむことなく苦節凡そ五年、次いで超華山(福建省順昌県西北六十里)へ赴いて、極菴洪公に従つて比丘律を受けた。時に元來、か人を易えても遂に嘔もうとはしなかつた。父太公は櫻栗

五台は、山西の五台山と見なされているようであるが、若冠十六才の少年が得度のために行くには遠きに過ぐるの嫌いがないでもない。ここにいう建武は恐らく建・武であつて建昌、邵武(Shaowu)周辺を指していると考えられる。従つて金陵が建昌府城の在った南城 Nancheuy(臨川の東南)、黎川 Lichwan(新城の西北約二十哩)から邵武を経て静菴通公に参じたとすれば、五台は閩中にあるものとみなければならない。大清一統志地図によれば閩清県(Mintsing)の南西に五台山があることが知られ、福建通志によつてもその所在を確認することができる。元来が得度の師とした静菴通はこの山に住したものであろうか。仮に山西省の五台であるとすれば、長い道程において通過した経路や諸地点、偶発的事件等について何等かの記述があつて然るべきである。ところが伝においてはその後直ちに超華山の事に触れている。とすれば五台山と超華山とは比較的近接した地点にあるとみるのが自然であろう。^(⑤)金陵から南下して建武順昌を経て五台に到り、再び北上して順昌の西北超華山に上り、極菴通公から比丘律を受けられた元來は、その間に寿昌慧經が峯に拋つて洞上の玄風を挙揚しているのを知り、さうに北上してこれに謁したのである

が、超華山は慧經の所住からそれほど離れた處ではないから、彼の噂を耳にするのは十分あり得る事である。

元來は慧經の野人田夫然とした外貌に疑念を抱き、去つて閩の光沢(福建省光澤県 Kuangteng)にある白雲峰^(⑥)に入り、止ること二年、その間所得の見処を書に託して寿昌に呈したが、許されず、遂に稿を毀つて人に見せず、潛心宗乘を精究し、偶々宝方より來至した印宗上座の挙示する船子藏身^(⑦)の話によつて疑情頓発して寢食を忘れて工夫をこらし歳余にして趙州の有仏無仏^(⑧)の語を見て得あり、走りて寿昌に見えた。慧經はこの時、峯より遷つて宝方につたようである。

慧經の伝を繰くに、彼は二十四才の頃(一五七一年頃)峯に入り、大事を発明せざれば山を下らずと心に誓い、居ること三年、伝灯を閲して証悟し、二十四年の間峯に住したという。五灯嚴灯には万曆申午(一五九四)宝方に住すとあり、先の二十四年云々の記述にほぼ合する。元來が慧經にこの山で見えたのは、日果の所伝に従つて換算すれば、一五九八年頃の事となる。ところが元賢撰の塔銘によれば、通と別れた元來は、宝方に於いて無明老人に参じ、光沢の自雲峯に入つて空觀を修し、船子藏身の話によつて

疑情を発し、五十旬半、趙州の有仏無仏の機縁によつて省
あり、重負を仄くが如く『心經指南』を著して宝方の慧經
に寄せたが、宝方はたちどころにこれを焚棄したという。
元賢及び吳應賓は元來が白雲峯に三年居た事をいわず、單
に五十旬有半とのみ記している。(歳余とあるのに相当す
るとみられる。)これによれば元來が、宝方に赴いて慧經に
謁したのは一五九七年頃ということになる。その間、再三
簡を呈するも師の許すところとはならず、煩悶憂惱憔悴そ
の極に達したようであるが、精進を怠らず、偶々慧經が玉
山菴の請を受けるや、元來を同行せしめようとした。初め
元來は往くことを肯じなかつたが、師の勧説に従つて隨行
したのである。

その途次、慧經は君臣五位の旨を論じ、提撕勘弁切りに
努めた。機の熟したのを察知したからであろう。さらに仏
印禪師(一一〇九八)⁽¹⁾の偈をめぐっての問答があり、玉山
(玉山県北百二十里懷玉山?)に到るや元來は人目を避け
石上に趺坐し、護法神の地に仆れるのを聞いて豁然として
心が開け、作偈して慧經に呈した。この時すでに元來は師
に印可せられていたものの如くである。ただ心絶を得る
も命根断尽にまで至らず、末だ徹底を欠く憾みがあつたと

みえ、自ら勉励を加えること五十旬有半(歳余)、一日圓
寺を去ること五十里の地にあつたが、ほとんど足の地を
踏むのを覚えず、須叟にして宝方に到り、師に見え問答應
酬があつて頌を呈した。慧經は元來が師の信賴を欺かなか
つたのを喜び、命じて秉払せしめた。元來が大事を了畢し
たのは彼が二十七才の時であつたとされている。とすれば
日果の所伝の如く、光沢に止住すること三年、趙州有仏無
仏の話を見て省を得るまでの歳余、さらに玉山から帰つて
小棧に坐し、朝夕不眠の弁道の後、悟徹に至るまでの歳余
とあるのを合し、それ以前の経歴などを勘案すると、前後
の脉絡が通じ、年代も大凡一致する。師の慧經はこの間雲
棧を杭州に訪い、北上して嵩山、東都、五台を巡錫した。⁽²⁾
その北遊の詳細は他に譲るが、時期は元謐の来參と元來証
契の年時とを併せ考へると一六〇一年から董巖における開
法までの間とみられる。⁽³⁾慧經は少室から帰つて鞍峰に結制
したが、この時元來は第一座を占めた。また一説に慧經が
五台から宝方に帰錫してここに開堂説法した際、元來が首
座をつとめたともいう。元來は万曆壬寅年の夏、鷺湖養庵心
より菩薩毗尼を受けた。養庵心が鷺湖(江西省鉛山県北やや

東へ十五里、荷湖山、仁寿院あり、後に鷺湖寺と称す）に法化を闡いて十年、三百余の弟子を持ちながら元位を欠いたが、元來の來止するや亟かにもつてこれに嘱し、衆に首たらしめ偈を作つて贈つたといふ。而立にも達しない新参者を首座に抜擢した一事を以つてしても養庵が如何に元來を器重したかが窺われる所以である。養庵は雲棲株宏下の上足であった関係上、元來はその後三度雲棲に謁し、殊遇を蒙つた。鷺湖在住六ヶ月にして壬寅年の冬また閩の地に入りその間、万融円上座が辛苦して來參し和尚を拝請した。よつて照監院、成正、等价、等融、等處等八人の弟子を伴つて信州に到り、四十日の間任運に西巖辺を遊行自適し、祖印院に止ること七ヶ月にして博山に遷つた。万曆三十年頃の事と思われる。博山は江西省廣豊県西南の崇善郷にあり、⁽⁴⁾寺名を能仁と称し、五代の間、天台德韶によつて開創され、宋の紹興年中、薦福悟本が詔により開堂した。また黃龍清の嗣、無隱子経が元來の來山に先立つ五百年前に上堂説法した由緒ある寺刹であつたが、当時は伽藍も荒廃し、在住の僧は多く肉食者の類いであつたというから、戒律は行なわれず、一片の道心も持たぬ俗流の蟠居する処となつていたものであろう。そこで元來の叔父に當る広文君が主

唱し、近郷の有力者を動かして伽藍の修復をなし、禪律威儀並び行なわれるに至つた。元來の博山住山に際しては万融圓の他、後に警語に序した豊邑の劉崇慶、節推鄭維城、別駕楊時芳等の斡旋尽力によるところが大であると思われる。養庵は元來が博山に在ることを聞き知つて『授戒儀軌』を贈つた。當時仏乗に篤信の居士、沈蒸、趙士禎等が和尚を敬重し、その道譽は日に隆く、吳碧峯、何少峯両居士が邵武に新たに建立した宝安寺に請せられて上堂し、また同じく新建の廣福蘭若に開法し、数百人を化導した。後首座の成正を廣福に居らしめ、自らは博山に帰つて銳意寺門の復興に当つたのであつた。幾ばくもなく師の慧經は建陽(Kiencyang)董巖⁽⁵⁾の請を受け、その際元來に分座説法せしめた。⁽⁶⁾博山は弁才無碍に宗風を闡揚し、遍く世人の歎賞するところとなつた。それは元賢の記述によれば戊申年（一六〇八）の事であるといふ。万曆三十九年には參禪警語が刊行された。その後鼓山、大仰の諸刹が屢々結制を請い、よつて頻りに鞭影を垂れた。大仰山宝林寺に開堂したのは法弟元鏡の塔銘によれば乙卯年（一六一五）であり、この時元鏡は師を訪い相見し、覺浪道盛も丙辰年（一六一六）董巖に師を拝し受具したことが知られるからこの間再

三董巖に請せられたものであろう。しかしながら元來の本拠は終始博山に在ったものとみられる。博山には朔(北)は燕都、南は交趾を既くし、風を望んで至る者年に千を以て計したといい、その間に智闍を得て、大いに警策を加えること六年、推して首座を領せしめた。時に觀察詹太末は和尚の盛名を聞き、惠安寺に請せんとしたが、劉君(崇慶)とは布衣の交がある故にこれを捨てて公に就くことはできぬと謝絶した。詹觀察も強いるべからざるを知つて万融円上座を請して任せしめたという。元來の友情に篤き一面を偲ばせるものといえる。また出家の後、三十余年の間⁽³⁾絶えて音信のなかつた太公が和尚の風聞を耳にして博山に到來した際、孝養の限りを尽したものといえられる。和尚の弟子であった郡侯が舟を具えて送り届けたが、数ヶ月して父が卒したため、帰郷して墓に詣でんとした。その道すがら懷寧の人庶は香を焚いて和尚を仰導した。この時、人は皆互いに遅れを取らじと争つて贍礼したという。劉若宰、劉時芳なる者が度を求めたが、暫くこれを止めて菩薩戒を授け、十問を著し宗教異同の旨を論じた。廣錄卷二十一から五に載せる『宗教答響』の骨子をなすものと思われる。翌年、和尚の予見の如く若宰は進士に及第したのである。

つた。その間学士、太夫その他凡ゆる階級に亘り戒を求める者數万に及び、舒城(Shucheng)の南、涇城(Tungcheng)を過ぐるに幡、蓋をもつて迎える者倍増し、懷寧（現An king）の道路に叢萃並列し、人垣で師の顔を押す」ともできぬ有様であった。吳應賓が参じたのもこの頃の事である。彼は既に雲棲に参じて久しう、自ら知識を以つて自負していたようであるが元來は彼の頃を一見して、単に耳語の解にして、悟に於いては未徹なりとし婆子燒庵の話頭に対する見解を以つてこれを検して証となし、心服せしめた。ここに吳應賓は弟子の列に加えられ、かつ菩薩戒を授けられんことを願い、頻りに鞭影を加えられることとなつた。因みに彼は師の寂後塔銘を撰している。方拱乾等数十人がこの頃同時に帰投した。ところで元來は請によつて桐城、皖城⁽⁴⁾、浮山⁽⁵⁾の諸所に化を垂れたが、舒城に至つて太公の墓に詣でんとした時の如きは舒城の人、和尚を礼せんと狂奔し、墓前僅かに和尚の席を余すのみであったという。帰途、桐城、懷寧の周辺には導迎の人さらに増し、受戒者も無慮千万人に上つたと伝えられている。師は墓参のため山を離れること凡そ九十日にして能仁に入り、帰山の上堂があつてその後暫くは在山したようである。この間師懸経

の所住、宝方でも上堂したことが知られる。

天啓丁卯年（一六二七）、余大成が博山に來至した。^④ 居士は夙に禪理を窺い、維摩を以つて自任していたといい、初見においては彼は敢て下ろうとはしなかつたともいわれるから、かなりの見識を有したに相違ない。しかし相共に語るに及んで信敬の念を生じ、遂に弟子の礼を取つた。元來も彼が一隻眼を具する者であることを認めていた。元賢は丁卯年相見についてはいわず、単に崇禎己巳（一六二九）の年に余開府が陳丹衷と共に師の許に至つた事のみ記しているが、それは師の示寂する前年に当る。余大成は博山門下で僧伝に名を連ねる数少ない居士の一人であり、書簡の往来や交友の状況から察して、師催化の前年に面識を得たものとは考えられない。まして厳格を以つて鳴る元來が、斯く短時日の請益で嗣法の門人に類する扱いをするとは考え難い。従つて崇禎己巳（一六二九）は博山が天界に入つた年であり、その事は門人の一人である道舟の塔銘によつても明らかであつて、この時かつて屢々提撕を蒙つた居士が師に再会したものと解すべきであろう。

これより先、閩中の曹学佺等が鼓山に師を拝請せんとしたことがあつたが、辞して行かなかつた。この年の冬（丁

卯年中）重ねて懇請されたため福州（Foochow）に赴き、鼓山湧泉寺^⑤に開法した。來參者は数千余人に上り、塵を揮い席に拋る音、まさに潮吼の如くであつたと述べられてゐる。

慧經について久しう禪を学び、その入滅後は、博山に帰投した黃端伯ともこの地で数年ぶりに再会し、旧交を暖め、越格の宗乘を談じたものの如くである。端伯はかつて警語及び臘錄に序を寄せた人である。崇禎戊辰（一六一八）の春鼓山より石鼓^⑥を経て帰る途次建州を過ぎ、閩中の荷山^⑦に隠れて聖胎の長養を専らとしていた法弟元賢と開元寺に相見して建州に法幢を建てるなどを勧説したことがあつた。元賢は後日を約し、やがて師の期待に応えたのであつた。翌崇禎己巳年（一六二九）、元來は広信（現Shanjao）より舟に乗つて鄱陽（現Poyang）を過ぎ、湖口に出て長江（Chang Kinang）を渡り、石頭城（江蘇省江寧^⑧）の江岸に登り済生庵から天下の第一禪林、金陵（現Nanking）の天界寺に入ったのであつた。その際余開府は魏公除弘基をはじめ諸縉紳を糾合し、書幣を以つて陳丹衷に托し迎えさせた。途中、導迎の儀の盛况は桐城におけるそれに優るとも劣らぬものがあつたと記されている。魏公は初度の

日、師を礼して天界寺に登座説法せしめたが、この日金陵の人、白玉光が寺の周辺に映えるのを望見し、ある者は四天王が雲端に出現する等の奇瑞を見たと伝えられる。上下尊卑となく踵を接して到り、その面積數十里に及び、優に数十万を容れるに足る広域もこれがため狭隘の感があつたといふ。また四輩の弟子となる者、億万を計し、香積の資、日に鉅万に上る云々とも述べられている。

たとえそれが誇張された文学的修辞に過ぎないとして、金陵の人士を刮目せしめる盛大な法儀が行なわれたのであろうことは推測に難くない。予て師を敬慕していた姑蘇の監軍、劉錫玄も奔馳して到り謁し、疑義を剖き、別伝の道を開示される機を与えられたのである。その他に金陵では徐六翁、晚上、吳盛、任文升、吳觀我、何芝岳、潘次魯、卓無量、黎太冲等の諸居士が師に參じたことが知られる。元來の法化が盛んであったことは廣錄や伝に記載するところによつて明らかであり、その化益を蒙った者は千万人云々が実数ではないにしても僧俗を含めかなりの数に上るとみられる。『高僧摘要』⁽³⁾の編者が元來を「化高」の中に配して紹介しているのは當を得た処置であるといつてよい。伝には師の赴く処学侶衆庶が雲集することが屢々述べ

られているが、彼がそのように熱狂的ともいえる衆人の帰仰を聚め得たのは一体如何なる理由に基づくのであろうか、思うにそれは個々人の器量や素質に応じた、しかも懇切で周到な師の化導の法によるものであろう。濃かな情愛と控え目ながら諄々と説得し人を動かさずにはおかしい強い感化力が人びとにある種の精神的安らぎを与えて、人を惹きつけたものとみられ、その事は彼が総じて寄せた多くの輓詩、祭文等の詩文や開示偈、あるいは伝中の記述によつて窺い知られるのである。⁽⁴⁾

劉監軍、余開府と別れた師は壽昌滅後十年なるを以つて、師塔を礼し、道に董巖を過ぎ、趙子來の参謁するに会つて往時を回想し、長笑してこれと袂別したが、この時師はすでに死期の迫つたのを予知したものとのようである。博山に帰ると廣文館博士彭曹源、份楊の太守聞中と謀つて建塔して身後の計をなし、結夏に『宗教通説』一巻を著し、九月に書成つて疾を示し、十七日の午夜、首座智闍を召して宗乘の奥義を論じ、首座の問疾の語に答え、筆を索めて「歷々分明」と大書し翛然として坐脱した。崇禎庚午年九月十八日の事である。世寿五十六、法臘四十一。翌辛未孟冬二十一日、智闍等全身を奉じ、師自筮の地、博山の西方棲鳳

嶺の陽に塔し、弟子吳應賓が銘を撰した。寂後台州の道嵩、壁如が師の語を集めて『曇錄』若干巻を編し、世に行なわれたという。これは恐らく本邦に流行する『博山老人刺錄』^④六冊に当るものと思われる。日果の伝には警語について触れるところがない。曇錄中には含まれていいから、師の所説として、当然これを擧げるべきであろうし、それに晩年の撰述である『宗教通説』一巻を加えることができる。その他『宗教答響』、『錫類法擅』等も各別に刊行され、曇錄の他に『無異禪師語錄』と名づけるものも流行したようであるが、何れも年次を詳にしない。壬午（一六四二）年の冬元賢はかつて博山に戒を受けたことがあり、師資の義によつて塔を建てて衣鉢を蔵し、これに銘した。翌崇禎癸未（一六四三）元賢が頤呻齋で編した語錄集要是これらの精要を擧少し、閲覽に便ならしめたものと考えられる。広錄は元來の法孫で博山に住した弘瀚と、首座弘裕の彙集にかかるものであるから、さらに若干後れるとみなればならない。弘瀚の伝は不詳であるが、弘裕は万暦壬子（一六一二）頃の生れで、十六才で元來に謁し受具したが、二年後師の遷化に遭い、法嗣道奉に就学し、博山にも住した人である。博山は元來の寂後、智闍、道舟等が

相繼いで祖席を襲うたのであるから、弘瀚の住山は少なくとも順治末年以降とみなければならないからである。法孫といつても、共に博山の警教に接した者である。なお師の伝に関する僧錄の記述は大同小異であるが次のようなものがあり、併せて校勘すべきである。

五燈會元統略 卷一・下

五燈嚴燈 卷十六

南宋元明禪林僧賢傳 卷十五

續燈存藁 卷十一

續燈正統 卷三十八

五燈全書 卷六十二

祖燈大統 卷九十三

正源略集 卷三

高僧摘要 卷四

さらに註記に引用した諸資料および

忽滑谷快天『禪學思想史』下六七七—六八六頁

望月佛教大辭典 九・一三一一頁

の他参照。

蒋維喬『中國佛教史』四・三九一四〇頁、等の諸書、そ

二、博山の受業と洞済両宗交流の一端

元来が慧經の法嗣たることは疑う余地のないところであるが、慧經に嗣法した門人としては他に元賢、元鏡、元謐の三人を挙げるのが普通である。しかしながら徳清の言によれば得法の弟子は元來のみということであり、事実慧經が遷化した当座は恐らく博山を除いて他はさほど注目されていなかつたのである。元賢の如きは師事すること十年余にして慧經の死に遭い、その後博山の下で三年の間就学したといい、自ら師資の義ありといつているほどである。博山は謙遜して法弟と呼んではいるが博山の法益を蒙ることまた大であつたといつて差支えないであろう。

ところで当時の修業者は宗派や法系の如何を問わず力量の優れた師家を求めて遍參するのが一般的な風習であったとみえ、そのため時として師資の関係が不明瞭となる場合も見受けられる。元來は前述のように、鷲湖の下で首座をつとめたが峯頂和尚養庵心（一五四七—一六二一七）は南嶽下二十七世投子紹琦（一四〇四—一四七三）下五世の法孫であるとせられる。養庵心は続灯存藁十二、正源略集八、五灯

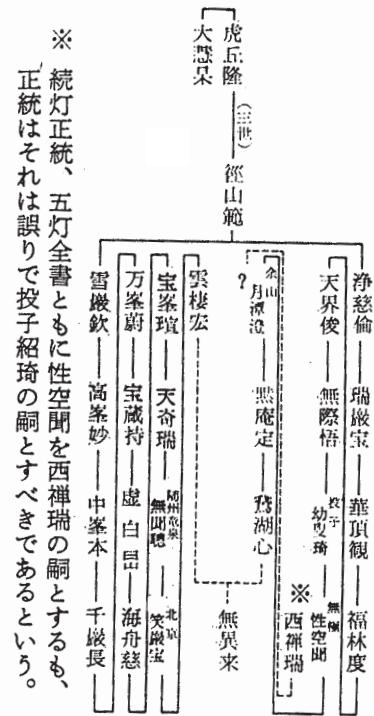
全書百二十、五灯嚴統十六、續指月二十等に伝が見えるが何れも未詳法嗣の扱いとなつてゐる。ただ續灯正統三十のみが華山の默庵定禪師の法嗣であることを明記している。⁽⁴⁾ 鶯湖の遷化は天啓丁卯年（一六二七）とみられるが、その際元來が鎖龜師および眞茶の導師をつとめたと考えられる。⁽⁵⁾ その師承関係を辿れば別表⁽⁶⁾ の如くであるが、養庵はまた株宏に就学し、稽古略統集には師に得法したと記されている。默庵、雲棲ともに虎丘派の一流に属する。元來がその関係で株宏に愛顧せられたことについては既に触れた。ところで、意図的に為されたものかどうかは明らかではないが、先に少しく触れた師の慧經が北遊した際、問法乃至交友の関係をもつた宗師達が互いに法の上での繋がりがあつて、まさに網の目のように入り組み絡み合つてゐることが判るのである。別表参照。即ち瑞峰は株宏と同じく虎丘の法孫笑巖德宝（一五一二—一五八〇）下であり、達觀（一五四三—一六〇三）は徧融（一五〇七—一五八五）の嗣であり、株宏、養庵ともにこの徧融に就学している。元來の禅に臨済的な要素が色濃くみられるのはこのような受業の関係を見ればその原由も自ら明瞭となる。また彼が時に念佛の実修を説いたことも念佛公案を一般化した紹琦の流

れを承けていることから自然なことともいえるのである。⁽⁴⁾

博山のみならず寿昌もかつて雲棲を訪い、その嗣元賢また宝善寺に雲棲下の聞谷大師（一五六六—一六三六）に参じ戒を受けている。博山は無際悟の法孫寿堂松の嗣古音淨琴の『醍醐集』を重刻するに際して序を寄せた。⁽⁵⁾如上の事から寿昌派は臨済宗、特に虎丘派との交流が極めて自由にしかも頻繁に行なわれたことが知られるのであり、自らそこに臨済的な色合いの強い宗風が形成されたものとみられる

のである。特に禪警語には大慧の影響が看取されることを一言付け加えておきたい。

表(1)



表(2)



(実績は師承、点線は就学の関係を示す。)

(1) 無異元來広録卷三五。続藏一一二、三〇一二、一九四〇

(2) 同広録三五、一九六〇

(3) 元賢広録卷一八、続藏一一一、三〇一四、三〇六〇

(4) これららのうち「博山和尚伝」が最も記述が細微に亘り、しかも信頼度の高いものと見なされる。

(5) 駒氏稽古略続集。続藏一一二、乙六一一、一四五〇

雪浪集一巻が写本として伝わっている。伝に記載はないが博山は石頭城に遊び懲、達、朗の三大師に参じ、受業の師となしたという。生歿年は（一五三五—一六〇七）

広録二三、一四二〇

(6) この事については呉應賓及び元賢撰の伝は触れていない。恐らく短時日の滞在に過ぎなかつたものと思われる。

(7) 福建通志一、三三六頁上

※ 統灯正統、五灯全書とともに性空圓を西禪瑞の嗣とするも、正統はそれは誤りで投子紹琦の嗣とすべきであるという。

※ 統灯正統、五灯全書ともに性空圓を西禪瑞の嗣とするも、恐らく正統はそれは誤りで投子紹琦の嗣とすべきであるという。

この山は周囲が広く泉水が分れて五流となり西北の二流は邵武の境に入る。雲台山に接し西は邵武に界す。

(8) 福建通志一、二八二頁上

大塩毒山『支那仏教史地図』には博山が河北の保定に住したことを記している。また曾普信は山東の博山に住したという。『中國祖師伝』三六四頁。両所は比較的近接しているがその時期や出典等については詳にしない。

金陵の東北、真州（儀徵県）にも五台と呼ばれる所があり、一時博山に参じたことのある淨燈の所住である。

福州府の烏石山も奇勝が多くそこに五台山があり王氏によつて文殊台と南北東中四台が創せられたという。通志一、卷四、二五六頁下。

(9) たた静庵通の伝が明らかでないから確言はできない。当時も山西の五台へ上ることは盛んに行なわれたようで雲谷、寿昌ともに上山している。これらを考え合せなお検討する余地はある。

(10) 縣城から二十里、雲氣の立ちこめる嶮しい山が聳え、白雲峰は北七里の地点にあるという。福建通志一、卷十二。二七四頁上
警語巻上に「船子没蹤跡句」を見るとあり。

徳誠の略伝は景德伝灯錄一四、大正藏五一、三一五a

五灯会元巻五、続藏八八C 空谷集巻一、第六則「爽山船子」
続藏一一二、二二一三、二六九C

(12) 趙州録巻中に「見有仏処、急走過無仏処、不得住」とある。

無異元來禪師略伝（長谷部）

五灯会元四、続藏一一二、乙一一一、六四d

(13) 卷一六、続藏一一二、乙一二、四三七〇a

日杲はその状を「面目黧黑膚僅支骨」と記し応賓は「形色枯瘠望之似木雞」と形容している。

(14) 雲居山了元「蟻子解尋體處走云々」の偈。

問答の語は五燈嚴統、卷十六、続藏本三四三aに見える。

(15) 了元は饒州、浮梁県北十里、明堂山の近くで生れた。伝については、阿部肇一『中國禪宗史の研究』二二二頁。

(16) この事多く灯史の元來伝に録す。因みに無門関第五則に香巖上の樹の話がある。

(17) 広録八、九〇c

慧經語錄四、続藏三四a

(18) 元來の証契によって後継者を得て北遊の旅に発つたとみたい。寿昌不在の間は博山が請われて上堂したとみえる。

(19) 広録二、六五b

(20) 祖印院は円通居訥の所住。ここでの上堂の語は廣録一、六〇a江西通志三、一一四八頁下。

(21) 江西通志六、二五九一頁下。通志の三によれば博山は広信府広豊県西北三十余里の地にあり、南は谿流に臨み、遠望は廬山の香鏡峯のようであるという。西南、崇善鄉は能仁寺の所在であろう。禪學大成所収警語の解題には上饒県とする。

(22) 五灯嚴統巻二〇、続藏四四六C。薦福寺は鄱陽県東三里、薦福

無異元來禪師略伝（長谷部）

山にあり。

五灯全書、続藏四五一 d 広錄四、七四 c

廣錄四、七四

雲陽德和（一五二八—一五九四）初住開法の所といふ。

廣鎌五十七。 弓羽鎌下四二二。

博山和尚位によれば豊経は応仁の晦なく書を以て元来に升

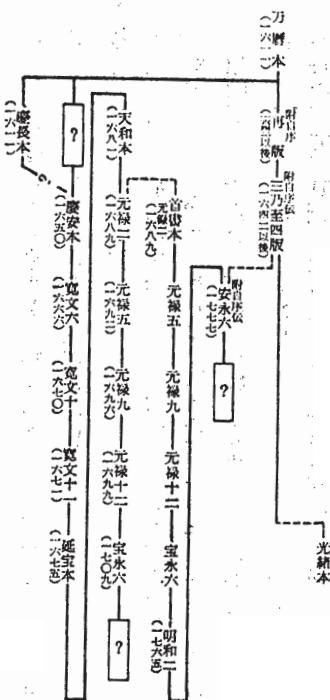
慧經は戊申の春傳震南、趙基虛の請によつて董巖に開法結

制し、その冬宝方を回り、翌春には寿昌に入っているから、こ

の時後事を元来に託して董巖を去つたものと思われる

博山広報にも戊申に重ねて董巖に至るとある。八〇a

を表示すれば、



(29) 建陽県崇泰里の高仰山か。

續藏一一二、三〇一一、四四 b

廣錄三四、一九一b

安徽省安慶道に屬す

安徽省潛山縣治

安徳行刑時四百二十里　五河県東三千里の地　少卿我等と洋山の舎利を捧し、山頂に釋迦塔を建立した。玄縁一三、一〇

七a。浮山華嚴寺における小參。八七c

廣錄三、七一

元賢はこれを崇禎己巳であるかの如く記しているが、それは博

山が天界寺に開

（生）との間の往復書簡などからその交友が僅か一年足らずの事

とは考えられず、まして、居士が師の法嗣に加えられてゐる事

から推しても、少くとも丁卯年の藝術と見るべきであろう。曾

普信は余大成が山東の巡撫たりし時元来に召仰したといふ。中
國祖師云「三六五頁」。

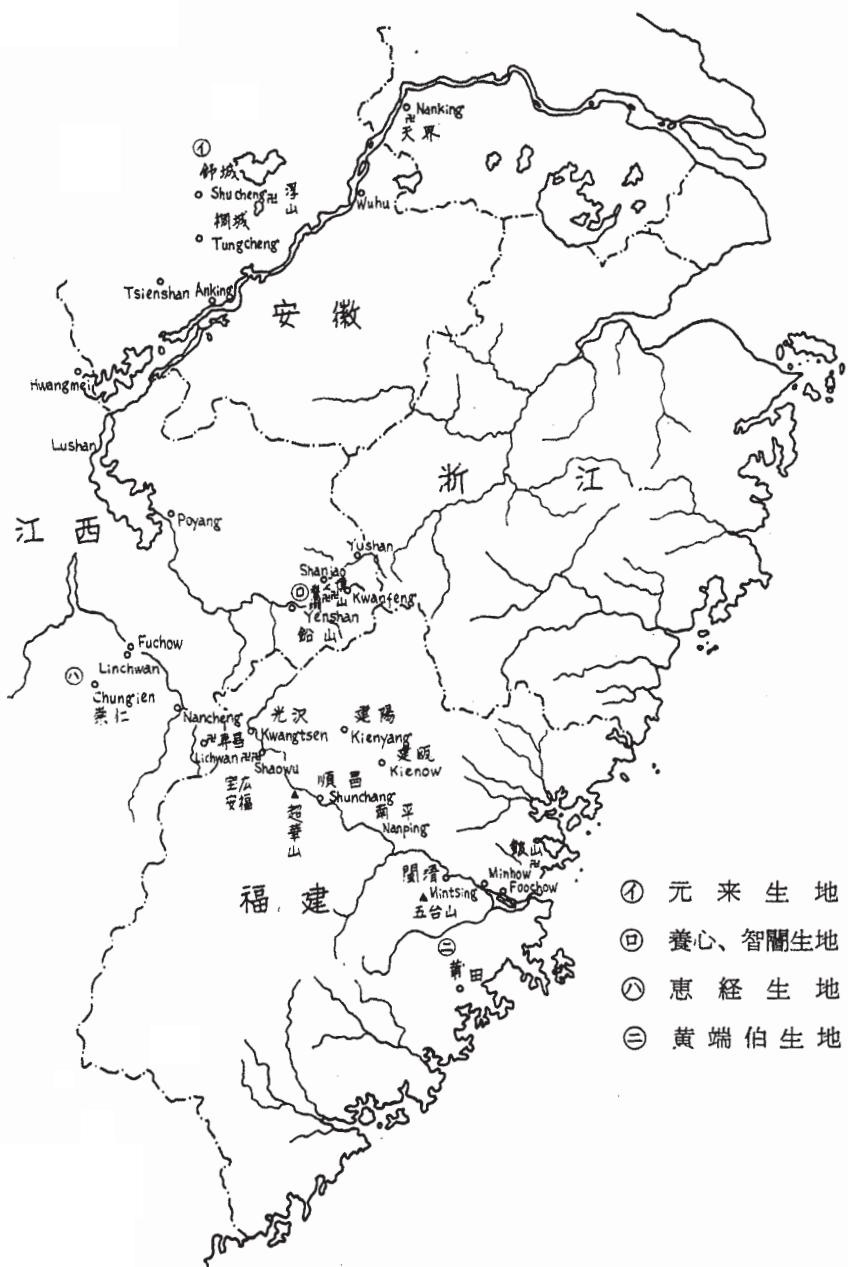
福建閩侯三十里

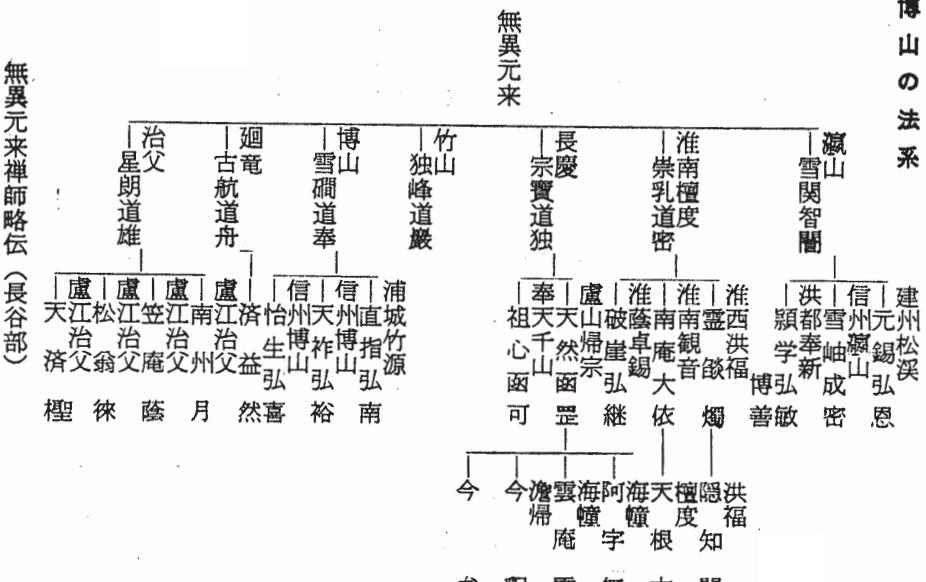
鼓山から三十里ほどの

難であつたが、師の行くに及んで水俄かに漲り、渡り終るに及ん

で旧状に復したことが述べられている。日果撰の伝、一九六二年（昭和三七）九月、『明治の文豪』（明治文庫）、二〇〇〇年（平成十二）二月、『明治文豪』（明治文庫）。

順治三年（一六四六）卒。黃端伯の墓は建陽の玉枕山（三桂





年時	(内西暦)	元来の事蹟	関連事項
万曆 (三五七五)		元来舒城に生る。	
万曆 (一五七八)		元賢建陽に生る。	
万曆 (一五八〇)	金陵瓦棺寺雪浪座下に法華 の講を聴く。遠兩師に参ず。		
万曆 (一五九二)	超華山へ詣り極庵通法師に 従い比丘律を受く。義峰に 慧經に参ず。義峰に入る。 『心經指南』を著す。		
万曆 (一五九四)	鷺湖養心より菩薩毘尼を受 く。鷺湖に首座となる(六ヶ 月)。雲棲を礼す。	慧經に印証せらる。	
万曆 (一六〇〇)	慧經に従い玉山に至る。	慧經宝方に住す。	
万曆 (一六〇二)	元鏡宝方に到り慧 經に参ず。	慧經宝方に住す。	
万曆 (一六〇四)	慧經盧山、武昌、 荊襄を経て洛陽に	入る。	

無異元来禪師略伝（長谷部）

万曆 (三八〇)	万曆 (三六一) （三六〇九）	万曆 (三二一) （三六〇四）	万曆 (三一) （一六〇三）	万曆 (二九一) （一六〇一）	万曆 (二九一) （一六一〇）	万曆 (二九一) （一六一四）	万曆 (二九一) （一六一四）	万曆 (二九一) （一六一四）
智闇來參。	慧經に代り建州董巖に開法。元賢これに従い剃染（編年戊申とす）	春、慧經董巖に開堂。冬、慧經宝方に帰錫。	若武に入り広福、宝安二蘭成正を広福に留め博山に帰寺刹の經營に専念。	博山能仁寺に住す。	宝方寺重建。	萬曆 (二六一五) （一六一六）	萬曆 (二六一五) （一六一六）	萬曆 (二六一五) （一六一六）
万曆 (三六〇八)	萬曆 (三六〇八) （三六〇九）	萬曆 (三二) （一六〇四）	萬曆 (三一) （一六〇三）	萬曆 (二九一) （一六〇一）	萬曆 (二九一) （一六一〇）	萬曆 (二九一) （一六一四）	萬曆 (二九一) （一六一四）	萬曆 (二九一) （一六一四）
太公博山に來至。	万融円寂。	萬曆 (三二) （一六〇四）	萬曆 (三一) （一六〇三）	萬曆 (二九一) （一六〇一）	萬曆 (二九一) （一六一〇）	萬曆 (二九一) （一六一四）	萬曆 (二九一) （一六一四）	萬曆 (二九一) （一六一四）
万曆 (三六一〇)	万曆 (三六一〇) （三六一〇）	萬曆 (三二) （一六〇四）	萬曆 (三一) （一六〇三）	萬曆 (二九一) （一六〇一）	萬曆 (二九一) （一六一〇）	萬曆 (二九一) （一六一四）	萬曆 (二九一) （一六一四）	萬曆 (二九一) （一六一四）
『參禪警語』刊。								

太公舒城に帰り卒す。七十才。智闇瀟山に住す。太史劉若宰、度を求む。芳來りて度を求む。

若宰、時芳に菩薩戒を授く。

太史十間を掲げ

宗教異同の旨を問う。

この頃『宗教答響』成る。

太史道獨來參。吳應賓來參。拱乾等數十人帰

崇禎 (一六三〇)
(一六三一)

崇禎 (一六三〇)
(一六三一)

『宗教通説』を著す。
元來示寂。

全身を本山棲鳳嶺の陽に塔す。

『續錄』成る。

智闇博山に住す。

智闇示寂。

元賢博山の「衣鉢塔銘」を撰す。また「無異大師語錄集要」を編す。

桐城に上堂。舒城に上堂。浮山に上堂。父の墓に詣る。宝方に上堂。

養心の為に真を致す。

鼓山の請を受け湧泉寺を開法。

養心示寂。

冬、余大成來參。

黃端伯來謁。

崇禎 (一六四二)
東 隆 真 著
新刊紹介

『瑩山禪師の研究』

A5判 定価 300円

(東京) 春秋社
昭和四十九年五月三十日 発行

道寿来山し出家す。元賢と相見、博山に帰る。

董巖に再度開法、春光孝寺に元賢と相見、博山に帰る。

『宗教答響』刊。

無異元來禪師略伝 (長谷部)

崇禎
(一六二八)

堂。請により金陵天界寺を開

崇禎
(一六二九)

董巖に再度開法、春光孝寺に元賢と相見、博山に帰る。

『宗教答響』刊。

崇禎
(一六二九)